

ラスオリギャグSS    デブ飯指揮官！（1話） ～ソワン、ナエン：限  
界突破カルボナーラ～

よりぼく

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ラストオリジンのSSになります。

ソワンイベント後のお話を想定しております。

- ・ソワンイベントのラストエピソードの行動ネタバレ含みます
  - ・基本ギャグ調で話を進めていますのでキャラ崩壊
- 以上にご注意下さい。

特に司令官、コンスタンツアはキャラ崩壊が著しいです。

目次

## デブ飯指揮官シリーズ

ここはオルカ（潜水艦：巨大で居住区も兼ねる、人類最後の砦）の執務室。

主の私が今日の秘書コンスタンツアと共に、各バイオロイドに対する指令、報告書の承認と整理を行っていた。

仕事も一息が付き、椅子に深く座り直すと。

（ああ、料理を食べさせたい…）

と、自分の欲望の声が届く。

あのソワン騒動以降、私にはこんな衝動が起きるようになってしまった。

切り出しやすいコンスタンツアに思いを伝え、寵愛を与えたのは数ヶ月前からだったか…

「いかにいかに、気を直さねば。」

しかし欲望は認識したが最後、再現なく沸き立ち更なる獲物を求め溢れだして止まらない。

自己満足でも彼女だけでも足りないかと暴れるそれを止めるには、最早新たな犠牲者を出すしか無かった。

欲望が器から溢れて、言葉となって表れる。

「急いで事は仕損じる、確実にやる。」

今回の料理と食べさせる相手を考え、そして食事から逃れさせない押し付けルートを考える…

そんな悪巧みをして仕事を進めていると、遠征から帰投したミホがノックもまばらに入ってきて来た

「司令官ー、かえったよー おわあ!?え?何かまた余計なこと考えてない!?!」

流石ミホだ、話が早い

「発作だ、食材を集めろ!今回のターゲットはソワン、ナイトエンジェルだ!!たっぷり作るぞ、ミホも食べるか?」

「…!!いやー!お手伝いさせてもらおうよー!たっぷり作るんでしょ、支援メンバー読んでくるから準備してて!!」

察してミホが駆け出ししていく、良いことだ。

しかし、この調子では命令しなければ彼女は準備だけで食事はしないだろう。

：残念だが仕方ない、命令されて取る食事など本当に私がやりたい事ではないからな。

さて、今回の面子は私の癖を認識させた者たちだ。私の持てる全てを注ぎ込もう。

—————

数時間後、食堂

—————

呼んでいたゲスト達が集まり始め、食堂にすべてのキャストが揃う。

「ご主人様、食事会に及びいただきありがとうございます」

「司令官！一部が大きくなる可能性を秘めた料理って本当ですか！」

適当に返事をうち、皆をそれぞれの席に座らせる。

ああ、これから考えると心が跳ねて仕方がない。

「これより調理を開始する!!」

「そうね」「本当に一部が…!!」

ああ、楽しませて貰おう。

「さあ！始めました！司令官の料理！ここからの解説は私コンスタンツアが勤めさせていただきます！」

「コンスタンツアさん？その服装はどうしたのですか？」

ソワン驚くのも無理はない、コンスタンツアがいつものメイド服ではなく、上下ジャージに頭にはタオル巻きという服装でハイテンションで解説をしているのだ、動揺ももつともである。

ここは助言せねば、小言スタートなどレシピには載せれない。

「いや、最高の服装だ…コンスタンツア、君が理解をしてくれて本当に感謝している」

顔を赤らめコンスタンツアははにかむ

「私は、ご主人様のためならばどんな事でも大丈夫です。

それに、私の中のお姉さまも喜んでいるのですから！」

……

「さあ、料理をお願いします!!」

いかんいかん、あまりにもコンちゃん可愛すぎるのがいけない、魂を奪われる所だった

よい切り替えをしてくれた盛り上げ隊、ジニヤ、フォレストメーカー、キャロル、ポルティヤなどの声上がり、部屋の温度と湿度がむあつと上昇する。

ああ…この空気だ…始めねば!

「さあ、今回の料理は麺!!カルボナーラになります!!」

「カルボナーラ?」

「ベーコン・チーズ・生クリーム・卵などで作ったパスタソースですね」

「それが一部に効果があるのででしょうか…」

疑問の表情、普通の料理会と思っているな? 非常によりリアクションである。

「さあ、まずは肉からです! 鳥、豚、ベーコン、ソーセージをたっぷりとバターが溶けたフライパンでまるで揚げるかのように熱していきます!!」

「!?!」

「サプライズ肉!!」

「バターの香り最高!!」ウオオオオオ

タオルを回し、興奮を表現する盛り上げ隊

ゲストは困惑しつつもこの空気に吞まれている…

そこに、次なる一手が打たれる

「そして付け合わせのチーズフリッターのあげ始めです!! チーズ! チーズチーズの揚げ物!!」

「!!」

ゲスト達は見た、そして司令官の要求を察する!!

カロリーを食え、と!!そして繋がる、最近のコンスタンツアがイキイキしてツヤツヤテッカテカしてた理由を!!

そう、これこそが司令官の寵愛! 望むべき姿、平穩に望むものだ…!!

司令官の思いが形となる

それは罰であり礼、感謝と恨み、そして自分の趣味に染め上げたいという欲望!!

「ふわー！美味しそうですねー！」

ああ、それは本当だ、だが彼女達の女が警告を鳴らしている、コレはいけないものだ！と

それと同時にこの香りに捕まれた胃袋が、脳髓が伝えてくるー  
(もう、逃げられない)と

そう、指揮官のレシピ通りに料理が進んでいくー

「火が通った所にたつぷりの焦がしニンニクと生クリームを追加！  
さあー！一気にSOURCEが形になる!!」

「めっちゃ胃袋に響く香りが食用をそそりますう!!」

ぐぐり、とソワン、ナエンの喉が鳴る。

まずは鼻が墜ちた。

「さあ、そこに固めに茹でた平麺投入!!めっちゃ絡んで吸う!!肉汁を!!これでもかと絡む!!吸う!!吸う!!」

「そこには美味さしか存在してない!!山盛りで欲しいですう!!」

この連続攻勢に盛り上げ隊は早くも最高潮だ。

「卵を絡めて麺部分の完成!!さあ盛り付けへ入ります!!」

ベーコンを敷き詰め上に麺を載せ盛り付けていく

「あーつと!!ここでハチミツ！ハチミツを縁のベーコン達にかけていく!!ベーコンのしょっぱさとハチミツの甘味が複雑な味を生んでいく!!麺を積み上げてフリッターを載せ!!完成！完成でしょうか!?!」

「カロリーが積み上げられていく…」

さあ、視覚もこれで詰みだ!!

「とどめに載せられたのは目玉焼き!!」

これで本当に完成です!!ベーコン！チーズ！卵！麺!!これぞ完璧、完璧なカルボナーラ!!」

きゆるると鳴る二人の胃に、勝利を確信する。

パツパツと盛り上げ隊の分も盛り付けをし、並べる。

早速盛り上げ隊とコンスタントアは満面の笑顔で叫んだ。

「いただきます!!」

さあ、次は君たちの番だよ、と二人を見る。

「」

…ゲスト席に寄り、絶句している二人を見て笑みがこぼれる

「さあ、御上がり下さい？ そんなに量もある訳ではないだろう？」

食え、と言う命令は絶対にしない

そんな事をする必要もない

その指示は彼女らの胃と脳髓からのもの以外不要!!

「いただきます」

「いただきます」

皆、それだけを言いはむはむ、パクパクと食事を始める。

美味しさと、それを増す山盛りの罪悪感。

十数分後、私の目の前には空の皿がずらりと並んでいた。

「盛り上げ隊の皆様、ありがとう…皆のおかげだ、本当に皆素晴らしいよ

…」

「どういたしまして、またお願いします」

「メに、お行儀は悪いが皿のソースをこの焼きたてパンで吹いてくれ

…」

「はい!!」

この声を聞いてゲスト達がこちらを見る。

彼女達のすべてを覚悟したと思ひ込んでいた表情に心が震える。

食べきったと思った所に申し訳ないなあ…本当に。

「ああ…君達もどうだい？」

「お願いします」

ああ、今回の料理会は大成功だ…

また、欲望が溢れたらまたやろう。

次の獲物を考える、一度こぼし切ったはずの欲望が、またこんこんと湧いていた。

おしまい

~~~~~



## 後日談

「確かに、三食ツナ缶が続くとこの欲望が溢れるが…狙ってやるのはやめてくれよ? コンスタンツァ」

「…善処させていただきます」

彼女は、根本的に自分の欲望が大事なのだ。その心が嬉しくなり、また笑みと欲望が溢れてくる。

「コンスタンツァ、命令だ 着替えて秘密の部屋(調理室)に来なさい」

「はい、ありがとうございます! ご主人様!」

さあ、今度はどんな料理を作ろうか…。